カトリック
広島教区報
No. 70
カトリック
広島司教区
発行責任者
広 報 担 当
服部大介神父
広島市中区幟町４-42
広島司教区館内
TEL (082) 221-6017

第33回カトリック「正義と平和」全国集会・広島大会開催！

「平和の使徒」となる 恵みの機会・新たな決意

およそ一年前から、心を一つにして準備をしてきたカトリック「正義と平和」全国集会が、九月二十二日（土）から二十四日（月）まで、広島の世界平和記念聖堂とエリザベト音楽大学をおもな会場として開催された。特に二十三日（日）は広島教区民が集う日として、各地から一〇〇〇名以上の人々が集まり、盛大な大会となった。またこの大会に参加できない方々に対しても、司教メッセージが出され、各地で平和の使徒としての恵みの機会を持ち、平和への決意を新たにした。

『広島大会の火』平和の火（星野村より）

今大会の中心となる、社会司教委員会のシンポジウムに先立ち、満員のエリザベト音大のセシリアホールの熱気の中、「大会の火」として星野村から採火して来た平和の灯が、大会委員長である三末篤實司教の手で安置され、二日目のプログラムが始まりました。

引き続き、松浦司教の司会で、「信教の自由と政教分離」という本を執筆された三名の司教（高見大司教・谷司教・溝部司教）によるシンポジウムが行われました。体調の不良で参加できなかった執筆者の一人岡田大司教も本来は参加する予定で、この大会に対する司教団の熱意が伝わってくるようでした。

シンポジウム（５人の司教）

それぞれが執筆されたものについて時間の許す限り、まとめて説明してくださり、本を読んでない方々にも、分かりやすく伝わったのではないかと思います。

司教団が一致してメッセージを出すということは、そう簡単なことではないこと、しかし、二年前に出した「非暴力による平和への道」というメッセージ続いて、どうしても今回の「信教の自由と政教分離」という表明はしなければならないものだったことを言われたとき、カトリック信者の一人ひとりが、しっかりと理解し、新たな決意を持たねばならないことを強く感じました。

（服部神父）

シンポジウム会場の様子

第33回「正義と平和」全国集会・広島大会 プログラム

９月22日（土）

■**現地学習**として、『被爆証言＆碑めぐり』『被爆証言＆世界平和記念聖堂見学』『軍都廣島＆原爆遺跡めぐり』（４面参照）『岩国から軍事強化の現実を検証する』の４つのプログラムが用意され、教区内外から約200名が参加しました。

■ワークピアで開催された**交流会**には、約200名が参加し、司教様のお話や各教区の紹介などのプログラムがありました。久々の再会や参加者同士の情報交換など大いに盛りあがりました。

９月23日（日）

■**社会司教委員会シンポジウム**（１面参照）

■**分団会**は、５つの会場に分かれ、それぞれ司教様を囲んで分かち合いをしました。

■**子どものプログラム**は、マザーテレサのことをビデオや写真展で勉強し、最後にお祈りを書いてミサで奉納しました。約40名参加しました。

■**英語の集い**は、約40名が参加し、平和についての分かち合いや歌の練習を行いました。

■**ポルトガル語の集い**

■今回の大会の中心である**ミサ**には、約1200名が集い、共同祈願は色々な国の言葉、第一朗読は点字など、いろいろな人が祈り集まれるようにと工夫されました。

■**松元ヒロさんソロライブ**（４面参照）

■**ネットワークミーティング**

■**原爆ドーム祈りの集い**（５面参照）

９月24日（月・祝）

■**分科会**は、以下の14の分科会に分かれ、それぞれ発題者や司会者を中心に行われました。

【分科会１】　憲法９条と教会の役割は…

【分科会２】　核と人類は共存できない
～ヒロシマ・イラク・世界のヒバクシャ～

【分科会３】　米軍再編と前線基地・日本
～防衛・外交といえども主人公は市民・自治体～

【分科会４】「正義と平和」、信仰の立場から

【分科会５】　部落解放と人権問題

【分科会６】　多文化共生社会をめざして～外国人の人権～

【分科会７】　障害者問題、他人事？

【分科会８】　生きるためhow much?（ナンボヤネン）～雇用問題と人権～

【分科会９】　地球温暖化、放任しておいて大丈夫？

【分科会10】　見えていますか相手サイン・聞いていますか相手の気持ち
～自殺、いじめ、虐待などの現場から～

【分科会11】　青年と世界の平和を考える

【分科会12】　靖国問題とカトリック教会の戦争責任

【分科会13】　今、日本がもう一度向き合う人々（こと）
～東ティモールの慰安婦だったアボたちを訪ねて～

【分科会14】　HIV/AIDS感染拡大から見えてきたもの

■**派遣ミサ・閉会式**《集会宣言》

■**世界平和記念聖堂見学**

「正義と平和」全国集会 広島大会を終えて

大会実行委員長
祇山　登（呉教会）

昨年二〇〇六年十月に、前回の京都大会から引継ぎ、第一回広島大会実行委員会が開催されて月一回の定例委員会を重ね、今秋九月二十二日から二十四日の大会を迎えることができました。

まず、本大会が滞りなく無事閉幕できたことは、一重に、多くの方々のご支援、ご協力の賜物です。本当にありがとうございました。

私たち広島教区民は、広島教区固有の召命「平和の使徒となろう」を掲げ、それに向かって『平和の使徒』として、自分にできることを精一杯取り組んでいく使命を担っています。

広島大会実行委員会メンバー、大会に関わるボランティアの方、そして多くのご支援、ご協力を頂いた方々が、自分たちの役割を果たすことができたことを喜び、そして実感しています。単に大会をやり遂げたことの充実感、安堵感、脱力感ではなく、広島教区民の皆さん、そして全国から参加された方々に対し、「私たちにできる『平和の使徒』としての精一杯の活動」ができたことを喜びのうちに感じていることでしょう。

今大会の特徴は、この広島教区固有の召命、そして年間テーマでもある「平和の使徒となろう」をどのように発信していくか、そして教区の年間サブテーマ「殉教者を想い、自分の信仰を生きる」において、どう実行していくか、ということを中心に構成しました。

大会二日目の九月二十三日を「広島教区民の日」と位置づけ、一人でも多くの広島教区民が集って頂くよう呼びかけました。参加した方が「平和の使徒」となるための『きっかけ』を見つけて頂くためです。

また、メインプログラムの社会司教委員会シンポジウムは、『信教の自由と政教分離』の発刊に併せて、その執筆者である社会司教委員会の司教様方をお招きし、直接熱い想いを語って頂きました。今後、私たちカトリック信者が、どのように歩んでいくべきかを考える、良い機会となったのではないでしょうか。

この「広島教区民の日」は、一人でも多くの方が会場に足を運んで頂くよう、様々な企画を準備しました。

まずは、可能な限り主日のミサを本大会のメイン会場「世界平和記念聖堂」で共に献げて頂くことに注力しました。そのため、教区専用の案内を作成し各所に配布して参加の呼びかけを行いました。ただ、全国向けの案内との混乱を招いてしまい、反省しています。

しかしその呼びかけに、多くの教区民の方が賛同され、遠方の小教区は大型バスで、近隣の小教区は主日のミサを行わないなど独自に協力して頂きました。その結果、「広島教区民の日」は約一二〇〇名の方が集う盛大なミサとなりました。

また、子どもと一緒に家族で参加できるよう「子どもたちのプログラム」、外国籍の方のために「英語の集い」「ポルトガル語の集い」を同時に開催することで、信者がひとつになれるような工夫も企画しました。

「広島教区民の日」「社会司教委員会シンポジウム」を今大会の柱としましたので、分科会は最終日、しかも限られた時間での開催となりました。全国から参加された方の中には、多少物足りないと感じられたかもしれません。しかしながら平和に向かって、共に集い、共に考え、共に実感することができたことは確かです。

本大会の評価は人それぞれ異なりますが、その中で大きな実りは、「大会の準備、運営に多くの人が携わった」ことが挙げられます。

大会そのものが「打ちあげ花火」のように、一時の華やかさとその後に残る空

しさに終わることも否めませんが、少なくとも大会に携わった人は心の中に「平和の使徒」としてのきっかけを見出したことは間違いないでしょう。

特に青年たちは、自分たちのやるべきことを彼らなりに精一杯、考え、実行しました。まだ暑い日差しの中、道案内、各会場作り、Tシャツや冷たい飲み物の販売、そして何より、すべて自分たちで企画、準備、実施した二十三日夜の「原爆ドーム祈りの集い」。彼らのエネルギーの源は、まさに「平和の使徒」としての神の恵みと実感するほかありません。

「ヒロシマだから」という見方もあるでしょう。「大会の灯（平和の火）」「岩国、米軍基地の現実（現地学習）」「被爆者証言」「ヨハネパウロ二世、平和アピール」など、本大会で忘れてはならない大切なことが多くあったのは事実です。そのため平和の発信には、プレッシャーのようなものがあったような感じです。「そこまでしなくても」という葛藤が準備期間にあったことを振り返ります。

当時は、笑顔が消えかけることもありましたが、大会当日は、スタッフの真剣なまなざしの中で笑みがこぼれることが多かったように思えます。まさに「平和の使徒」としての歩みです。

皆さんは、この大会を通して「平和の使徒」としてのきっかけを見つけることができたでしょうか？

これからもキリスト者として、祈り、共に歩んでいこうではありませんか。

感謝のうちに。

現地学習　軍都廣島＆原爆遺跡めぐり

軍都廣島（加害の歴史）と原爆遺跡（被害の歴史）を半日でめぐるこのコースには、札幌から高松まで全国から約五十名が参加した。案内は高橋信雄さん（原爆遺跡保存運動懇談会）、石川まゆみさん（教諭）で、見学したのは比治山、宇品、平和公園、広島城址（大本営跡）など、毎年行われる広島教区平和行事のプログラムと殆ど重なるコースだったが、実際に

これらの保存運動をされている方の言葉には説得力と重みがあった。

平和公園では各所でご自身が聞かれた被爆証言を交え、原爆が落とされたとき相生橋のたもとで生き延びたという方、「・・さんは人々が川になだれ込む中を、あそこの雁木に座ってずうっとがんばったんです」と、正にその場所を目の前にお話しされるなど、そこにあった一人ひとりの命へと私たちの想像力をかき立てられた。過去をしっかりと見つめ「ヒロシマの声」を世界中の人々に届けることが、「核兵器のない地球」を作る未来を切り開くことにつながるというお話は、私たち広島教区民の使命に通じると感じた。

九月の下旬とは思えない日差しと暑さの中をバスを乗り降りしながら歩いて廻り、終盤には雨が降り出し、参加者から「内容的にも体力的にも、ちょっとハードね」との声もあったが、ヒロシマを体で感じるという貴重な体験ができたのではないだろうか。

（岡山教会・湯原）

松元ヒロさん　ソロライブ

「正義と平和」全国集会に、お笑い芸人のヒロさんを呼ぶというのはちょっと奇抜な発想かな、といささかの不安もあったのだが、他の実行委員の後押しもあり交渉をスタートさせた。当日は「信教の自由と政教

分離」という難しいテーマでシンポジウムと分団会が行われることになっていて、参加者の皆さんがほっと息をつけるような何かが欲しいと考えていた。それがスタンダップコメディの世界では知る人ぞ知るヒロさんだったのだ。

七〇〇名以上の人でセシリアホールはほぼ満席になった。いつものように腰を低くして登場し、人なつっこく会場に語りかけるヒロさん。でも平和を脅かすものに対する異議申し立ての鉾先は少しも揺るがない。会場はしょっぱなからどっかんどっかんの大受けで、ひとまず胸をなでおろした。ヒロさんのそらんじる憲法の前文が高らかに響き渡ったときは胸が熱くなった。

「松元ヒロは平和を食い物にしているって言う人がいるんですよ。でも、戦争を食い物にするよりはいいですよね」全くそのとおり。

この広島大会はヒロさんを「平和の使徒」として全国に派遣します。

（山口教会・増田）

原爆ドーム祈りの集い

二十三日、原爆ドーム前で、肥塚神父様、後藤神父様のお話を聞き、相生橋を渡り、原爆ドームの対岸で祈りを献げた。

祈りは、テゼの歌とともに、詩（林幸子「ヒロシマの空」）、詩編、共同祈願、アシジの聖フランシスコの平和を求める祈りなどが読まれ、最後に〝すべての人の平和を〟を歌った。

青年たちが企画・運営した今回の祈りの集いには、約一五〇名の参加があった。

原爆ドームと元安川、そして大会のシンボルである平和の灯を臨む祈りは、原爆の犠牲者を想い、平和を願う静かな祈りの時間となった。

（青少年情報センター・門野）

広島の殉教者②（マチアス庄原市左衛門）

庄原市左衛門は、獄に繋がれていたアントニオ石田神父から受洗し、マチアスを洗礼名としました。

庄原は、おそらく生まれ故郷の地名ではないかと考えられています。

一六一四年、徳川幕府の徹底的なキリシタン禁教令の影響は、福島正則統治下の広島にも及び、教会は閉鎖されました。

宣教師たちの滞在が困難になった状況の中で、イエズス会士石田神父は広島に潜伏し活動を続けましたが、一六一七年春に逮捕・投獄されました。

市左衛門は、獄中にあってもなお生命を賭けて宣教する石田神父の世話をしながら、パウロを彷彿させるような神父の熱意に心を動かされたにちがいありません。

禁教令に背き犯罪人として投獄されても教えを宣べ続ける神父と、キリシタンになれば死の危険があることをわかっていながら受洗したマチアス。

この二人の信仰の証しは、殉教という美しい実りを結ぶことになります。

一六一九年八月、福島正則の改易に伴い石田神父は解放され、厳しい迫害の中司祭職を全うし、一六三二年九月三日、長崎西坂で殉教しました。享年六十三歳。（一八六七年に教皇ピオ九世によって列福）

マチアス庄原市左衛門は、福島正則移封後も新広島城主浅野長晟の家臣に迎えられました。

一六二三年、徳川家康による江戸大殉教の余波は全国に拡がり、一六二四年の宗門改めの際、マチアス庄原市左衛門は密告によって投獄され、強く棄教を迫られましたが、応じることなく信仰を堅く守り抜き磔刑に処せられました。

マチアス庄原とともに広島の信仰共同体を支え、マチアス庄原より三日前に処刑されたフランシスコ遠山甚太郎は、獄中のマチアスに長い励ましの手紙を送っています。

庄原市左衛門は、刑場に連行される道すがら、ロザリオの祈りを唱え、大声で「キリストの教えのほかに救いの道はない」と訴えました。一六二四年二月十九日、自分が磔られる十字架を見あげて「めでたきかな、聖なる十字架よ、我は汝をあがめ、汝を誉め讃え奉る」と語りかけ、槍で貫かれて殉教しました。享年三十四歳。

マチアス庄原市左衛門の遺体は、仲間の信者たちが生命の危険を冒して、十字架から降ろし、棺に納め、神父の住んでいる播磨まで海路で運ばれました。

平和行事

ともに、学び　行動し　祈ろう
〝そして一歩前へ〟

今年は日本聖公会とテーマを共有させていただきました。

平和行事を振り返って

実行委員　高濱和浩

今年も八月四日～九日にかけて平和行事を行いました。テーマは「ともに、学び　行動し　祈ろう―そして一歩前へ―」。

例年、平和行事の特徴は若い人たちの参加が多いということです。委員会で把握している範囲で、さいたま教区、横浜教区（菊名教会）、名古屋教区高校生、京都教区中学生、大阪教区中高生、高松教区小学生が巡礼団を組み参加しています。多くの人が、平和の巡礼者として過去を振り返ることは未来に責任を担うため…と学びの場としてヒロシマを選び、ヒロシマに来られました。

そして昨年から始まったのですが、今年も日本聖公会と一緒にプログラムを考え実行していきました。私たちは聖公会と主の祈りなどを一緒に唱えています。しかし唱えているだけで、行動にあらわしているか？と問われれば、考えてしまいます。

平和巡礼のよさは何か？と青年に聞いてみたところ「日ごろの生活では愛や平和なんて恥ずかしくて語ることはないけど、広島では真剣に愛と平和を語れて分かち合うことができるし、聖公会の人とミサを献げることができること」と答えてくれました。横浜から来た青年は「広島はやさしい」という感想を伝えてくださいました。

原爆死没者のためのスピリチュアルコンサート

八月四日、エリザベト音楽大学同窓会レクイエム実行委員会が中心となり、原爆死没者のためのスピリチュアルコンサートを開催した。プログラムは、グレゴリオ聖歌、パイプオルガンによる演奏、フォーレのレクイエム。会場となった世界平和記念聖堂には約七百名が詰めかけ、音楽とともに原爆死没者の慰霊と世界平和への祈りが献げられた。

被爆者証言

今年の被爆者証言は早副神父様と祇園教会の加藤文子さんにお願いした。参加者は中高生を中心に約百三十名。

加藤さんは被爆当時十五歳。学徒動員先での被爆だった。「生かされた私の使命は伝えること」加藤さんのお話は、実際体験された人が目の前にいるからこそ、みんなの心に深く残るものとなったようだ。あと二十年もすれば被爆者はひとりもいなくなる。平和な世界の未来を一人ひとりが考えながら、「一本の鉛筆」のメッセージを残してくれた。

加藤さんの証言を聞いた後、参加者に感想文を書いてもらった。集まった感想文は百枚近く。その中から一つ紹介したい。

「『平和』この二文字の大切さがわかった気がします。

私たちは今現在、恵まれた環境で、恵まれた時代に生きていて、幸せボケというか平和慣れしているような気がします。今日ここに来てお話を聞いて平和慣れしている自分が恥ずかしいです。学びたいときに学べ、食べたいものを食べることが出来る私たちは本当に恵まれています。このまま平和になれてしまったら、また戦争が起きてしまま

うんではないかと思います。六十二年前ここで起きた事実をいつまでも忘れてはいけないと思います。戦争経験者がどんどん減っている今、未来に受け継いでいけるのは私たちなのだと思います。これが私たちに出来ることだと思いました。世界中が平和になるためにちっぽけな私たちですが、何か行動に移せたらいいなと思います。」

平和行進

八月五日、若者を中心に、例年より百五十から二百人も多い参加を得た平和行進。昨年からの日本聖公会との合同プログラムは、祈りの集いに引き続き始まった。カトリックからは、東京、埼玉、横浜、名古屋、京都、大阪、高松、長崎、そして広島の人々が集まった。

行進のすぐ後に世界平和記念聖堂で行なわれたミサの説教で、高松の溝部司教は平和行進のありようを話された。「私たちの平和行進は少し観光的だったかもしれません！」「私たちがどんな意識で行進したか、もう一度振り返る必要があります！」と。確かにそんな雰囲気であったのかもしれない。…そこに私たちに責任があることを感じた。

『私たちが今アピールしなければならない事は…今、核を使えば人類は破滅します。広島が言わないとだめなんです。ぼくたちが生きているのは、〝核の時代〟だと強く意識することです。』これは、われわれ平和行事実行委員会の元である「平和を願う会」を結成された、西尾禎郎先生の言葉。

平和行進は、過去二十五年の歴史の中で、静かな行進もあったようだ。いろいろな変遷を経て、現在は、歌うことも祈りと解釈している。戦争反対、平和アピール、政治色を出した時代もあり、また、キリスト者であることをアピールした時代もあった。逆に、沈黙の行進もあったと、先輩たちは話してくれた。

変遷の結果として、現在の状態に落ち着いてはいるが、内容と意義については、現在も迷いを持ちながら「今にふさわしい」アピールを考えて行きたいと思う。

平和祈願ミサ

毎年、八月五日に行われる「平和祈願ミサ」は、今年も全国から多くの人達が参加した。特に今年は、日本聖公会との協働、それはまさに愛と・平和、そして希望に満ちた人々の〝祈り〟だった。キリストの真理「愛と平和」を賛美する歌声は、天にも届くほどに平和への想いが込められた、活気のある暖かな感動のミサだった。

カトリック・聖公会の司祭が一緒に「平和ミサ」を捧げる、〝何とすばらしい出来事〟だろう。私達は心から〝本当の平和とは何か〟と常に問いかけ、小さな事も意識しながら、まず行動し、気持ちを一つにして平和の実現をめざしていかなければならないと思う。

原爆犠牲者追悼ミサ

八月六日八時より、広島市近郊にある慰霊碑を、絵と詩で紹介する祈りの時間をもった。大型スクリーンに写し出された慰霊碑は、過去の暗いイメージはなく、広島の平和に対する願いを伝えたいというやさしい詩と共に、皆の心をとらえた。

十五分の原爆投下時間に合わせて黙祷後、約三百名が参列してミサが行なわれた。平日にもかかわらず、関係者や高齢者に加え、若い世代の参列も多く、継承されていると感じた。

地区便り

岡山・鳥取地区

〝平和推進チーム〟

月一回「日本国憲法を考える集い」を岡山教会を会場に行い、毎回約二十名が参加。十回目を数える現在は『信教の自由と政教分離』を読み深めている。今年度に入ってからは、正義と平和全国集会・広島大会への参加、啓発に力を注いだ。岡山・鳥取地区からは、バス四台などで百五十名余りが参加した。

〝きょうどう推進チーム〟

成功裏に終わった「正義と平和」広島大会における共助の姿こそ、真の平和の姿だと思う。〝きょうどう〟アンケートへの各地区・教会のご協力に感謝。集計作業を終え、分析作業に入っている。「協働」「共同」は、すでにさまざまな場面で行われている。「わたしたちは無力ではなく、微力です。協働すれば、大きくなります。」と言われた松浦司教のことばどおりである。今後、各小教区、各地区、教区レベルで将来に向かってどのように〝きょうどう〟を育てていくか、大きな課題である。

〝養成推進チーム〟

養成の取組み項目の一つ、「信仰の継承」は、「まず大人がミサや祈りを大切にし、互いに助け合い、愛し合う」ことが重要である。十月二十日（土）には、福岡サンスルピス大神学校の白浜満神父を岡山教会に迎えて、地区レベルで「ミサ」をテーマに講演会を行う。信徒がミサについてもっとよく知り、理解したいと思っていること、あるいは疑問に思っていることなどを中心に話していただく。これを来年度に予定している「聖体奉仕者」の養成につなげていきたい。

山口・島根地区

☆下関ブロック

下関ブロック三教会は毎年市民向けに著名な講師をお招きして「命を大切にする」講演会を実施している。

今年は九月二九日、梅光学院高等学校で約八百名がシスター渡辺和子から「両手でいただく」と題したお話を拝聴した。「一人ひとりがすでに神に愛されたオンリーワンであるという意識を取りもどさなければいけない。いつも喜び、たえず祈り、どんなことにも感謝しよう。人の命も、ものも両手でいただくことによって、有難いことになる。私たちは皆ある意味でホスピスに入っているのである。それにふさわしく丁寧に大切に生きよう。」とシスター自らの歩みも浮き沈みも人柄も傾け尽くして語りかけられた。シスターの思いが静かな迫力で会場の一人ひとりにしみとおっていった。

なお当日聴くことができなかった人のためにテープを三教会で貸し出す予定である。

☆萩教会

十一月十一日（日）
萩キリシタン殉教者記念公園／市内巡礼ウォーク

☆徳山教会

献堂五十周年記念行事
十一月二十三日（金・祝）
ミサ　十時半
祝賀会　十二時

海峡からの風8

下関労働教育センターだより

●センターがイエズス会の施設であり、管理者が司祭であっても、教会と少し違う点があります。司祭の意見も、〈ひとりの市民〉の意見として扱われるということです。●教会の運営で、司祭の意見や意向が過剰に配慮され、議論しにくい雰囲気があるために、納得できないという不満を聞きます。●先月教区の神父さんと話しをする機会がありました。神父さんは「ボクが赦すといったら無条件に赦される。ボクが祈ればパンとぶどう酒をイエススの体と血に変えることができる―ということだけは信じて頂いて、他のことはすべて平等に議論をすべきだと思う。司祭と信徒の差はそれだけです。」●〈自分はこうしたい〉、〈自分の経験でこうだ〉、という信念や自信があまりにも強いために、自分を絶対化し、他者が口を閉ざしてしまう結果に陥ってしまう。自分の信念や自信が他者に対して〈権力化〉してしまうのです。また、不満や疑問があるのに、きちんと問題化して議論しない側の〈内なる権力への弱さ〉が、他者の権力化を助長するということになってしまうのです。●市民運動では社会問題に様々な経歴や性格の違うひとびとが集まり、その取り組みを議論し行動します。●社会問題のほとんどが人間の権力に起因しています。せっかく、苦しんでいる人をなんとかしたいと集まったのに、そこに「権力」を発生させることは本末転倒であり、集まりが崩壊してしまいます。●両者が互いに尊敬し合い、考え、行動していくという、一見シンプルな市民運動の約束ごとは、実は私たちの信仰の根本でもある、「互いに愛し合いなさい」というイエススの言葉のとおりなのです。

（細江教会・廣崎隆一）

J-CARM（日本難民移住移動者委員会）
広島の新しい動き（2）

荻　喜代治神父

【フィリピングループ】

1「最近の動向」

(1)「松江」Srカルメンとフィリピン人信徒で「MATSUE PINOY KAPIT BISIC」（MPKB）を立上げ、司牧、教育、文化面での活躍をしており、市からの援助金も得ている。

(2)「広島」Frジェリー、Srカルメンの指導のもと、呉、廿日市、幟町のフィリピン人の動きがある。

ⓐ「在住外国人共生窓口」を、フィリピン人の協力のもと、近日中にラサール会館内に週何日か開設予定。

ⓑ 松江の「MPKB」同様の活動を、広島でも計画中。

2「淳心会」「フィリピン外国宣教会」「インファンタ」（姉妹教区）の司祭等が、教区内のフィリピン人、ブラジル人司牧専従として働いてほしいという希望がある。

【ブラジルグループ】

1「最近の動向」

(1) Fr尾島指導、Fr野中協力による黙想会が向原教会で行われ（十五名参加）、呼吸法の導入から始まり和解をテーマに行われた。

(2) 月の行事予定等を載せた小冊子をFr尾島が作り希望者に郵送している。

2「要望」サンパウロ教区で最近叙階した司祭の中に日本での司牧希望者がいる。彼ら及びSrコンソーラに広島教区でのブラジル人司牧への要請をお願いしたい。

【東チモール】

ファティマの聖母マリア小神学院

原田　豊己神父

一九九九年九月、東チモールの独立をめぐって住民投票が実施されました。インドネシア併合派は民兵を使って住民の恐怖心をあおり、多くの人々を虐殺し建物を破壊しました。また、多くの住民を西チモール（インドネシア領）に連れ出しました。

広島教区は一九九九年のザビエル来日四五〇年を記念して、これまでの諸外国からの援助に感謝し、これからはザビエルの精神に習って諸外国への援助を思考するようになりました。そのため、一粒会の規約の変更を行い海外への援助ができるようになりました。

二〇〇一年までたびたび現地を訪問調査し、九月の憲法制定議会の選挙結果を受け、一粒会総会の決定をもって二〇〇二年の独立後に小神学校（サンタクルス墓地の近く）へ三万ドルの援助を決定しました。現在は二万ドルです。松江教会と原田神父がこのプロジェクトの担当となりました。

現在、約百名の小神学生のために使用されています。現地の状況について神学院院長とも密接な連絡を取り合い詳細な報告書をいただいています。また、私自身が年一回のモニタリングを行い、現地の状況の変化に対応しています。

今回の訪問は深堀神父様を含め四名の神父でモニタリングを行いました。昨年の四月に軍隊内の対立から国家の分裂の危機がありました。現在でも数千人の人々が避難民として教会、修道院、神学校でテント生活を送っています。困難な状況にあっても人々は、信仰を守り（国民の九十六％がカトリック信者）、希望を失わず生活しています。私たちの援助によって、この小神学生から将来の司祭とともに、東チモールを担う人材が輩出することを願っています。

カトリックの雑誌 ⑧

カトリック中央協議会『ジャパン・カトリック・ニュース（JCN）』

ジャパン・カトリック・ニュース（JAPAN CATHOLIC NEWS）は、週刊で発行されているカトリック新聞の英語版ニュースです。カトリック中央協議会ホームページの英語サイトで公開しています。

カトリック新聞には、日本の教会内の出来事や行事を知らせる記事と、アジアの教会に関するニュースを報道しているUCAニュースからの記事が掲載されています。その中から、特に日本の教会について書かれた記事を中心に英訳し、一週間に二～三本の割合で記事をホームページに載せています。また、コンピュータを使って読むのが困難な方々のためには、印刷したものも、毎月一回発行しています。

カトリック教会の英語版ニュースを、一度お訪ねになってみませんか？スタッフ一同心よりお待ち申し上げております。

http://www.cbcj.catholic.jp/eng/jcn/index.htm

お問い合わせは、

TEL:03-5632-4431

FAX:03-5632-4457

Email:info@cbcj.catholic.jp

「JCN係り」まで。

教区練成会「生きる ―殉教者を想う―」

去る八月九日より十一日に東広島教会において、教区練成会を開催しました。列福にも関係するテーマですが、殉教をただ称えるのではなく、一人ひとりがどの様に自分の信仰を生きるかと言う事に焦点を当てました。楽しい工作や外を歩いての体験学習、ミサなどを通して、自分がキリスト者である事が参加者に意識されるなら幸いです。また、今年より高校生にも協力してもらいました。年代も近く参加者と楽しく過ごす中で自然に伝える彼らの働きは非常に大きなものがありました。日々の生活や日曜学校等へ活かして頂けるなら未来の教会の為に大きな力となる事でしょう。東広島教会の皆様をはじめたくさんの方々のご支援ありがとうございました。

インファンタ訪問の報告

高校生二名、大学生一名を含む八名で姉妹教区を訪問して参りました。今回は、高校生参加者が少ないですが、この訪問は、私の様な神学生にとっても非常に重要な体験に思われます。体験しないと分からない事があると言いますが、現地を訪問する事でただの異文化理解だけではなく、その地の人を意識する事、目線を変える事ができます。洪水被害からの復旧支援のみではなく、また私たちがそこから学ぶ事にも意味があります。幼子の様な気持ちで訪問するなら、支援する相手としての狭い理解から、主が共におられると言う事の広がりをまた違った角度から学ぶ事ができます。今後もインファンタ教区との交流事業にご理解をお願い申しあげます。

（猪口大記）

現地の子どもたちと

ひと滴〈55〉

「私は雲に私の虹を立てる 私と地との契約のしるしとして」

松江教会　原田豊己神父

三月二十二日に司祭叙階二十五周年を迎えました。

記念のカードには、司祭叙階のときに選んだ創世記九章十三節の言葉をそのまま使いました。

創世記の洪水物語に出てくる「虹の契約」箇所です。洪水をもって人類を滅すイメージは、神の憤り、厳しさ、怒りを感じさせます。しかし、世界を創造された神は、人間の過ちに洪水をもって罰する神ではなく、ノアを残すというゆるしの神としてご自身を現すのです。神のゆるしと愛の思いは、虹をしるしとする契約として人間と結ばれます。洪水物語は、罰ではなくゆるしと愛の物語りなのです。

一五八五年三月二十二日は、天正遣欧少年使節四名がローマに到着した日です。翌二十三日教皇グレゴリオ十三世に謁見をしています。帰国後の彼らには、厳しい現実が待っていました。伊藤マンショ、長崎にて病死。原マルチノ、マカオにて死亡。千々石ミゲル、棄教。中浦ジュリアン、殉教。中浦ジュリアンは、今年、福者に列せられることが発表されました。

司祭として、いつも神のゆるしと愛を伝えること、殉教者のような神に対する強い信頼を持ち続けたいと思っています。松江教会の信徒の方々をはじめ、皆様には心から感謝申しあげます。

風紋

教区行事では、「平和」というキーワードがしばしば重要となります。これは広島である以上当然のことですが、時々、複雑な気持ちになることがあります。「平和」というテーマを一面的な見方で捉え、矛盾を感じる人も少なからずおられるのではないでしょうか。

そのとき「イエスならどうするか」を感じることが大切なのでしょう。（み）